

日本古代の「酒」字墨書土器と在地仏教

門田 誠一

はじめに

二〇世紀後半とりわけ一九七〇年代以降に顕著になる大規模な発掘調査によって、古代集落の全貌が知られる事例が増加するとともに古代における文字を有する考古資料として、墨書土器や刻書土器、刻書紡錘車などの数量的な蓄積をみた。

墨書土器等の資料数の増加によって、語彙的な検討が可能になるとともに遺構との関係が考定できるようになった。これを受けて筆者は考古学資料としての特性を活かすべく、墨書土器の出土遺跡および遺構の属性を検討する一連の研究を行っているが、本論もその一環である。

本論では奈良・平安時代に属する墨書土器のなかでも「佛酒」に代表される仏教関係語句と「酒」とで構成される字句に着目し、本来、戒律で禁止されていたはずの酒を媒介として、古代の地域において実修されていた仏

教信仰の実態を明らかにすることを目途とする。

一、仏教関係墨書土器に関する主な見解

墨書土器に記された「酒」字そのものに対する言及は寡聞にして知らない。いっぽう、墨書土器の仏教関係字句やそれらと伴出する仏教関係遺物については、これらの出土例が集中する東国の奈良・平安時代を中心としていくつかの論考でふれられている。

次項で主な出土例をあげるように「酒」の字句を含めて墨書が施された土器を含め、そもそも墨書土器を含む出土文字資料は一九七〇年代以降の大規模な開発に伴う集落全体の発掘調査が陸続と行われた結果として、奈良・平安時代の集落遺跡から、質量ともに豊かな資料の蓄積をみることになり、現状では北海道から沖縄にいたる地域で十萬点をこえる墨書土器が出土しており、データベース化によって、全体の把握を行う努力が続けられている。

墨書土器の資料的蓄積は戦後の日本考古学の主要な成果と位置づけられるが、これに関する考究は一九九〇年代以降に展開した。その中でも奈良・平安時代の東国出土の文字資料の主な遺物としては、文字瓦・墨書土器・漆紙文書のほかに紡錘車などの石製品に線刻が施された例もあることが知られている。これらは集落遺跡から出土することから、民衆次元での漢字使用の実態や集落で実修された信仰や祭祀を知るために有益である。また、出土文字資料のなかには紀年銘資料が存在することから、記載内容の上限年代を知ることでもできる。

このような有効性を生かして、これまで平川南氏や高島英幸氏が集落における信仰の実態解明を重ねられてい

る。^①とくに、平川氏は墨書の分析から、仏教信仰と神祇信仰さらには中国起源の冥界信仰が混交した東国古代の集落内における信仰の実態を活写しており、本論の内容に資するところが大きい。^②

これらの研究にも明らかなように、墨書土器を含む出土文字資料から在地の宗教信仰を検討するためには遺物と遺構を有機的に結びつけることが大前提であり、このような方法は、本論で行う東国における古代仏教の実相を復原するために極めて有効である。とくに東国では墨書土器や刻書のある砥石や紡錘車などの例数が多く、かつまた集落遺跡の住居址から出土することが多いことから、集落内における仏教信仰の内容を直接的に考究できるという点において、すぐれた資料性を有するのである。さらにこれらの出土文字資料は伴出資料として、仏教的語句を示す木簡などの時期を推定することも可能となる。

このような東国の奈良・平安時代の集落遺跡から出土する文字資料について、本論に関係する限りにおいて、在地の信仰とりわけ仏教との関わりを論じたこれまでの主な研究を整理しておきたい。

千葉県を中心とした仏具出土集落を分析した宮田安志氏は本論で詳述する千葉県・ムコアラク遺跡出土の線刻銘紡錘車について、経文を刻したものと評価されたが、その根拠は示されず、経文の特定も行われなかった。そして、氏が「経文紡錘車」としたものとや鉄鉢形土器は、政治権力の主導によって行われた仏教と儒教の融合が、一般集落にまで展開した物的証拠とされた。しかし、国家による儒教浸透の方針について、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）四月辛巳条にみられる孝経を家蔵せしめるという記事のみによっており、さらに文献と考古資料とが具体的に対応していないという点で基本的な問題を残している。ただし、ムコアラク遺跡出土線刻銘紡錘車について、これも根拠は提示されていないが、仏教信仰と神祇信仰（在来信仰）との両側面の存在を指摘したことは先見的な知見といえよう。^③

千葉県域については、八・九世紀の仏教関係遺物や遺構の調査例について集成を行い、個々に吟味した資料集として千葉県文化財センター編の「古代仏教遺跡の諸問題」が特筆される成果である。内容については、後に個別の考察と関連してふれることになるが、特定地域における古代の仏教関係遺構・遺物を俯瞰できるように体系化した意味は大きい。⁽⁴⁾

仏教関連の遺物の点から観ると、瓦塔や瓦堂などの他にも、鉢形・香炉形・浄瓶形・水瓶形の土器や仏像、小金銅仏などの直接的な仏教遺物の出土が相次ぎ、この点でも古代東国における仏教信仰の具体相を示すものとなっている。⁽⁵⁾

いっぽう、墨書土器に記された仏教的字句に関する研究は存外に少ないが、たとえば荒木志伸氏は東国の奈良・平安時代の集落遺跡から出土する「寺」字およびこれを含む語句のある墨書土器に注目し、それらが集落内の仏教的な遺構そのものからではなく、周辺の竪穴式建物から多く出土していることに注目した。また、遺跡ごとの時期による出土数は一律ではなく、時期ごとにはばらつきがあることから、「寺」字墨書土器の使用には一回性が想定されたとした。これらを論拠として祭祀や儀礼等の目的の違いにもとづく実修行為の相違によると推定した。⁽⁶⁾

また、荒木氏は墨書土器が出土する遺跡の属性と関連して、山岳や丘陵地帯に所在する寺院遺跡を山寺と称したうえで、これらから出土する墨書土器を文字内容から、「寺」あるいは寺名・内部施設・吉祥句・寺院内の活動に伴う内容の四つに類型化し、これらの墨書土器は九世紀に盛行し、一〇世紀になると消滅していくとした。そのうえで、このような山寺における墨書土器の傾向は平地の集落域で行われていたと荒木氏が推定する現世利益的な祭祀・儀礼が、山寺で行われたことと関連する可能性を示唆した。⁽⁷⁾

以上のように本論の趣旨と関連する論考に限って摘要したが、墨書土器と仏教信仰や寺などの施設との関係についての専論は多いとはいえず、より具体的な研究を蓄積していくことが求められよう。

二、仏教的文字資料と関連する「酒」字墨書土器の出土例と分布

冒頭にふれたように本論の検討対象は奈良・平安時代の集落遺跡を中心として出土する墨書土器のなかで、仏教的字句と「酒」「杯」などの飲酒と関係する字句が組み合わされた語句が記されている主要な例について、出土例の多い関東を中心として、地域的なまとまりによって挙例する。そのうえで次項以下では当該墨書土器の分布および出土遺構と遺跡の傾向を含めた検討を行いたい。

①「佛酒・井」「酒坏」「酒」・庄作遺跡（千葉県芝山町）⁸⁾

芝山町の北東部の河川によって開析された台地上に立地する遺跡を小原子遺跡群と総称している。そのなかで庄作遺跡は小原子遺跡群のほぼ中央に位置しており、約一万七千平方メートルの範囲から、奈良・平安時代の遺構として、竪穴住居址七五軒、掘立柱建物址一一棟が検出されている。

主な出土遺物としては、瓦塔片、鉄製農具、鉄製紡錘車などがあるが、とくこの遺跡で特徴的な遺物は内外面に由縁が付着していることから灯明用に使われたとみられる土師器坏である。さらに注目されるのは土師器坏のなかに墨書文字が記された割合がおおく、墨書の内容は「丈部真次召代国神奉」「国玉神奉」「罪ム国玉神奉」「歳神」「竈神」などの在地の神祇信仰に関わる資料が多いことである。⁹⁾

とくに本論の趣旨と関連して注目したいのは、竪穴住居址（六八号）から出土した体部外面に倒位の方向すな

わち、正位の坏の方向とは逆方向に底部を上にして「佛酒」と墨書され、外底面に「井」の墨書文字のある土師器坏である。同じ遺構からは「酒坏」と墨書された土師器坏も出土している。これらの土師器坏の所属時期は九世紀前半頃と推定され、瓦塔片と鉄鉢形土器の出土も勘案すると、この頃までには当該集落において仏教が受容されていたと考えられている。

② 「大杯酒」「寺坏」・囲護台遺跡（千葉県成田市）¹⁰⁾

印旛沼周辺地域において、公津ヶ原と呼ばれる台地上に展開した遺跡群は、公津原遺跡群と総称される。公津原遺跡群のなかでも囲護台遺跡は東側の台地上に立地しており、古墳時代の住居址二〇五軒、奈良・平安時代住居址三六一軒などが検出された。六世紀中頃から九世紀中頃まで連続と続く集落遺跡である。出土遺物のなかでも、とくに注目されるのは墨書土器と刻書土器で、合計して一八四点が出土した。墨書土器、刻書土器ともに初現は八世紀代からであるが、盛行するのは九世紀である。

墨書文字には「五」「千」「弁」「貞」「人」などの一字の例と「千人」など複数文字の例とがある。その他に「大杯酒」（三一九号住居址）「寺坏」（六二三号住居址）の文字が墨書された土師器坏が出土している。「大杯酒」の墨書からみて、「寺坏」も酒を入れる容器である「坏」として用いられたことは確実であろう。この遺跡では仏堂など仏教関係の遺構は検出されていない。このような点から、「寺杯」墨書土器は近辺の仏堂的な施設と関連する遺物とみられる。

③ 「酒坏・由」「寺」「佛」・江原台遺跡（千葉県佐倉市）¹¹⁾

江原台遺跡は印旛沼と鹿島川の支谷によって形成された標高約二五メートルの台地上に立地しており、発掘調査によって縄文時代から中世までの遺構が検出されている。ここで取り上げる墨書土器が出土した奈良・平安時

代には、台地の平坦面に遺構が広く展開し、竪穴住居跡約二〇〇軒、掘立柱建物址約八〇軒が検出されている。集落の存続時期は八世紀前半から一〇世紀に及ぶが、中心となるのは八世紀後半から九世紀後半である。

主要な遺物としては、一×二間の小規模な掘立柱建物に近接した地点から出土した瓦塔があげられる。また、同じ地点では「寺」の墨書文字がある土師器坏が出土しており、その他の地点でも「佛」「酒坏・由」の墨書が記された土師器坏が出土している。

これらのことから、奈良・平安時代の集落に伴って、江原台遺跡では、集落内に瓦塔を安置した仏教関係施設が存在しており、その近辺で土師器坏を用いて、酒が供されていたことがわかる。

④「酒」「赤穂寺」・一夜山遺跡群C地区（千葉県佐原市）¹²

一夜山遺跡群C地区は香取神宮の南東一・七キロメートルの標高約四〇メートルの台地上に所在する。この遺跡はA地区・D地区に分かれており、そのうち、発掘調査が行なわれたのはB・C・D地区で、C地区は遺跡群の西寄りを占める。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居址九〇軒、掘立柱建物址一三軒、土坑四基をはじめ、多数の遺構が検出された。そのうち、平安時代の竪穴住居跡からは三〇〇点以上の墨書土器が出土している。出土した土師器坏には、寺名とみられる「赤穂寺」や「赤穂寺」や僧名とみられる「真勝」、集団名とみられる「火神部」や「酒」の字の墨書が認められた。

具体的にみると「赤穂寺」墨書土器が出土した竪穴住居址（SⅠ-31）と近接した竪穴住居址（SⅠ-5）から「□酒」「神」「火加木□」などの墨書がなされた土師器坏が出土している。報告書ではこの遺跡の北側の谷地部に「赤穂」の字名があることから、ここに寺院が存在した可能性が示唆されている。いっぽう、「□酒」「神」「火加木□」の墨書土器が出土した竪穴住居址では酒を用いて、「神」に対してする祭儀が行われていた可能性が

ある。「火加木□」については不明であるが、他の遺構で出土している「火神部」の墨書土器に関わる集団ないしはその職制に関連するなんらかの行為を示している場合があることのみを示唆しておきたい。

この遺跡では「赤穂寺」という仏教関係の墨書がある土器と「神」「□酒」のように在来の信仰が行われていたことを推定させる墨書土器が近接する竪穴住居址から出土しており、筆者はこれらが集落において実修されていた信仰の実態の一端を示すものと考ええる。

⑤「酒□」「佛」「三井寺」「寺」・滝東台遺跡（千葉県東金市）¹³

太平洋に注ぐ真亀川の支流十文字川および北幸谷川の両河川に挟まれた標高約六〇メートルの台地に位置し、南方向には九十九里平野を臨む。遺跡群は油井古塚原遺跡（古墳群）、滝東台遺跡、作畑遺跡、外荒遺跡の四遺跡を総称して油井古塚原遺跡群と呼ばれている。そのなかで滝東台遺跡は台地上および台地縁辺に所在し、約三万平方メートルの範囲で、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡二八七軒、掘立柱建物跡一五九軒が検出された。

竪穴住居址のなかで、H―一一九は各辺が三・九五メートル×四メートルと、規模的には大きな建物址ではないが、瑪瑙製勾玉や用途不明の青銅製品などともに墨書土器が出土している。墨書文字としては「酒□」「佛」「三井寺」「寺」などが記されている。この住居址は出土土器から、九世紀後半頃と推定されている。報告書では一軒の住居址から「三井寺」「佛」などを記した墨書土器が多数出土したことに關して、この住居址が営まれた九世紀後半以降に、集落遺跡としての滝東台遺跡に仏教が浸透したことを示すと論じている。また、報告書ではH―一一九住居址の北西約二〇メートルの地点で検出された掘立柱建物B―一三七を仏堂と推定し、「村落内寺院」とされる類型の遺構と考えている。さらに集落そのものは墨書土器が出土した住居址H―一一九の営まれた九世

紀後半に廃絶するとみられており、これは当該地域の集落遺跡に共通する特色であると指摘されている。

⑥「大富・酒杯」「寺・佛」・村田居山遺跡（千葉県香取市）¹⁴

村田居山遺跡は霞ヶ浦の南側で、現在の利根川流路の南にある標高四〇メートル前後の丘陵上に位置し、山砂採取に先立って発掘調査された結果、縄文時代の土坑や奈良・平安時代の竪穴住居址が検出された。奈良・平安時代の竪穴住居址一四軒のなかで三軒（SI九、一〇、一一）からは墨書土器が出土した。そのなかでSI一〇住居址から出土した土師器坏のうち、一点には口縁部外面に「大富」内面に「酒杯」の墨書があり、別の一点には、体部外面に「寺」、外低部に「佛」と判読できる墨書が記されていた。これらが出土した住居址SI一〇の年代は九世紀中頃から後半と報告されている。

この遺跡の発掘調査範囲内では仏堂的な施設は検出されておらず、また仏教関係遺物も出土していないが、「酒」字墨書土器と「寺」「佛」字墨書土器が同一の竪穴住居址から出土していることが注目される。

⑦「酒式升半・浄浄・稻五千」「西寺」「佛」「僧」・永吉台遺跡群西寺原地区（千葉県袖ヶ浦市）¹⁵

袖ヶ浦市の南東部に所在する最高所で標高七五メートルの台地の西側斜面に立地し、竪穴住居址一三三軒、掘立柱建物八棟の他に土器焼成遺構や土壇などが検出された。竪穴住居址の年代は九世紀から十世紀代まで継続したと考えられている。土器を製作する工房と土器焼成遺構の中心となる年代は九世紀後半から一〇世紀前半であり、この時期には土器生産が盛行したことがわかった。

墨書土器としては、体部外面に三行にわたって「酒式升半・浄浄・稻五千」と記された片口の土師器鉢（七二号竪穴住居址）や「西寺」（一〇九号竪穴住居址）「佛」（一一〇号竪穴住居址）「僧」（一一六号竪穴住居址）などの仏教関係の文字が記された土師器坏が出土している。

この遺跡は土器生産に関わる工人が住んだ集落であり、出土遺物も焼造された土器が主体であり、仏教遺物は出土していない。このような遺跡から「西寺」「佛」「僧」などの仏教関係の墨書が施された土器が出土していることは、集落に住んだ土器工人たちの仏教信仰の実態を示すものといえよう。この遺跡で出土した土師器鉢に記された「酒式升半・浄浄・稲五千」の墨書の示すところは、不明というほかはないが、「浄浄」を「淨い」あるいは「穢れがない」という意味に解してよいならば、何らかの祭儀に用いた容器である可能性がたかい。

仮定ではあるが、「西寺」「佛」「僧」などの墨書土器は、土器工人たちが生活のなかで接していた仏教の具体相を現すものであり、「酒式升半・浄浄・稲五千」墨書土器を彼らの行っていた在来の祭祀行為に関わる器物とみるならば、集落次元での信仰習俗の両相を示すものとみられる。

この遺跡の西側に谷をはさんで位置する台地には、永吉台遺跡群のなかで遠寺原地区と呼ばれる遺跡が所在し、竪穴住居址と四面庇の付いた礎石建物と同じく掘立柱建物が検出され、瓦塔や「寺」字を含む墨書がなされた土器などが出土していることから、八世紀末から九世紀末頃まで継続した仏堂を備えた集落遺跡であることがわかつている。井戸向遺跡出土の仏教関係墨書土器も、このような集落に関する仏教施設と関わるものと類推される。

⑧「佛」「寺坏」・白幡前遺跡（千葉県八千代市）¹⁶⁾

台地上から段丘中位面に立地する奈良・平安時代の集落遺跡で、つぎにふれる井戸向遺跡などとあわせて萱田遺跡群と総称されている。白幡前遺跡で検出された遺構は八世紀中葉から一〇世紀竪穴住居址二七九軒、掘立柱建物址一五〇軒と同時期の土壙などが検出された。墨書土器は判読不明なものも含めると七〇〇点以上出土している。そのなかで集落全体からみると、ほぼ中央にあたる場所から、溝で区画された範囲から四面庇付掘立柱建物や竪穴住居址などが検出された。このうち竪穴住居址の一軒から瓦塔が出土した。また、区画内の遺構からは、

「佛」「寺坏」の文字が墨書された土師器坏が出土した。これらのことから、区画内の建物は集落内における仏教施設であると推定されている。出土遺物から、この仏教施設の存続時期は八世紀後半から九世紀中葉頃とみられている。

以上のことから、白幡前遺跡では四面庇掘立柱建物を中心として、瓦塔を安置した建物などの仏教施設が存在し、そこで行われた仏教的行事や祭儀に「佛」「寺坏」などの墨書土器が用いられたと推定される。

⑨「佛」「寺坏」・井戸向遺跡（千葉県八千代市）¹⁷⁾

井戸向遺跡は谷津をはさんで、白幡前遺跡の北西に位置する。奈良・平安時代の堅穴住居址九五軒、掘立柱建物四四軒が検出された。この遺跡は集落遺跡であるにもかかわらず、仏教関係の遺物が出土している。その一つは青銅製の小型の仏像で、高さは五・三センチメートルの菩薩形座像で、背面には光背を付けた痕跡がみられる。この仏像の出土地点と近接する場所からは「佛」「寺坏」と墨書された土師器坏が出土した。これらの遺物の出土地点には仏教施設があったと考えられている。この遺跡では富寿神宝が出土しており、その製造年が弘仁九年（八一八）であり、集落の廃絶年代を推定する際の上限となっている。

井戸向遺跡、白幡前遺跡などをあわせた萱田遺跡群では「丈部」の字句を含む墨書土器が数多く出土していることから、これらの集落遺跡は印波国造の流れをくむ丈部直とその配下におかれた丈部によって営まれたとする見方が示されている。¹⁸⁾

⑩「酒」「寺」「寺塔」「佛」・萩ノ原遺跡（千葉県市原市）¹⁹⁾

萩ノ原遺跡は標高九〇メートル前後の台地上に所在し、これまでの発掘調査で、基壇建物址二棟、堅穴住居址二二軒、掘立柱建物二棟以上、瓦塔基壇一基、製鉄関係遺構などが検出された。

二棟の基壇建物址は古代の東国で類例の知られる仏堂遺構であり、そのうち、一棟（一号基壇・一辺八メートル）からは朱塗りの鉄釘が出土したことから、彩色された仏堂と考えられる。また、この遺構の中央部から出土した鉄釘など金属製品や「佛」字墨書などの遺物に關して、報告書では仏堂の建設に伴う地鎮具と考えている。もう一棟の基壇建物（二号基壇・一辺八メートル）からも風鐸、風招などが出土していることから、仏堂と考えられている。これらのほかに、基壇より前の時期に築かれた四面庇付の掘立柱建物も、東国古代における類例の存在から仏堂的な施設とみられている。この掘立柱建物にも建て替えが認められる。

以上のことから、この遺跡では、建て替えられた四面庇付掘立柱と時期的に前後する二棟の基壇建物をあわせて、四次の建て替えを経て、時期的には八世紀末から九世紀末にかけて、仏堂建物が存在したことがわかつている。出土遺物として重要なものは、須恵質瓦塔であり、これが仏堂に安置されていたと推定される。

上記以外の出土遺物には、灰釉浄瓶、香炉蓋などの遺物があり、いずれも仏具とみてよからう。墨書土器としては「酒」「寺」「寺塔」「佛」などの文字が記された土師器が出土しているが、そのうち「寺」字墨書土器が圧倒的には多く、墨書土器の四五パーセントをしめるという。

この遺跡は古代集落でありながら、瓦塔を安置した仏堂であり、このような遺跡が「村落内寺院」という類型として位置づけられる端緒となった。この用語の定立そのものについても議論が行われているが、そのことによって古代集落における仏教信仰の実像の一端を明らかにされるようになった。

この遺跡では、集落次元で建設された仏堂施設が「寺」と呼ばれ、そこに安置された瓦塔が「寺塔」と呼ばれたことがわかる。筆者はこの遺跡では「佛」「酒」字を墨書した酒杯としての土師器が出土したことによって、そこで仏に對して、土師器を用いて酒を奉じるといふ仏教的行事が行われていたと推定している。

⑪「草苅於寺坏」・草刈遺跡（千葉県市原市）⁽²⁰⁾

市原地域の最北部に位置する台地上に展開する広大な遺跡で総面積は約二六平方キロメートルに及び、時代的にも旧石器時代から中世まで続く全国有数の複合遺跡である。そのうち奈良・平安時代には約二〇〇軒以上の竪穴住居址からなる大規模な集落遺跡が存在したことが明らかになっている。それらのなかには灰釉浄瓶（K区三七〇号竪穴住居址・九世紀中頃）や青銅製箸（G区二〇〇号土壙墓・九世紀中頃）などの仏具が認められる。

集落にともなう墓跡も検出されているが、そのうち一基の方形区画墓（D区112墓）からは「草苅於寺坏」の墨書がなされた土師器坏が出土した。これは平面四角形の周溝で区画された東西六・二メートル、南北六メートルの墓で、本来は墳丘があったとみられるが、検出時はすでに削平されていた。墨書のある土師器坏は周溝埋土より出土している。この土師器坏は八世紀前半頃とみられており、墳墓の所属時期はこれに依拠している。

「草刈」は当該地域に現在の大字名としても残っており、ここに古代寺院が存在した可能性も考えられている。本論で設定した問題意識からは、建物構成は未詳であるにしろ、八世紀前半頃の仏教施設において、この節にあげた他の類例から、おそらく酒杯と推定される「坏」が用いられていたことが注目される。

⑫「酒」講院「九千・佛」・下総国分寺跡（千葉県市川市）⁽²¹⁾

昭和四〇（一九六五）年に実施された発掘調査では、金堂の基壇、講堂跡と塔跡が検出された。その後、平成元（五年）の発掘調査では、寺の範囲が東西三〇メートル、南北三五〇メートル程度であることや寺の施設や維持・営繕に関わる工人などの居住した場所などが判明した。

下総国分寺跡で墨書土器が多く出土する時期は八世紀後半から九世紀を中心とする。墨書文字としては「講院」（SA〇〇一）「九千・佛」（SK〇〇六）「造寺」（SD〇〇二）などの仏教関係の語句および国分寺における教

字と関係する語句とともに「酒」(SI〇〇九) 字墨書土器が出土している。「酒」字墨書が底部内面に記された土師器環は八世紀後半から九世紀前半頃と推定される竪穴住居址(SI〇〇九) から出土している。この住居址は造り付けカマドの他に三箇所の炉址が検出されていることと、炉から完形の高坏が出土している点などから、報告書では寺の炊事・給食に関わる施設の一つと位置づけている。さらに、報告書の考察では寺院の維持・営繕に関わった工人の住居址と推定される建物址にはカマドが付き、自炊能力があつたと考えられることと対比し、加えて「酒」字墨書土器が出土した住居址からは供膳用の高坏が出土していることから、寺院のなかでも特定の人々に食事を供するための施設と推定している。このように国分寺の特定階層ないしは属性の人々に高坏を用いて、食を供した施設から、「酒」字墨書土器が出土していることは、それらの人々に酒が供せられたことを推定させる。

これに対し、溝(SD〇〇二) から出土した土師器高台付皿には「馬・□・牛・荷酒・判・□人足馬荷・杼・遊女杼・□・荷酒・井上」という墨書があり、習書とされている。出土した溝が営繕施設とみられる遺構群に隣接し、かつ「荷酒」「人足馬荷」「遊女」などの語句がみられることから、運送などに携わった人々に関連しており、筆者は寺院そのものの運営と関わった可能性は少ないと考えている。

⑬「佛」「穴・酒坏」・中鹿子第2遺跡(千葉市)⁽²⁾

鹿子遺跡群は千葉市と茂原市にかけて分布しており、六遺跡から構成される。そのうち中鹿子第2遺跡は遺跡群の中央に位置する遺跡群で標高九五〜九九メートルの台地上に所在する。

発掘調査によって平安時代の竪穴住居址七二軒、掘立柱建物址一一七棟、土坑一五基が検出された。出土遺物に土師器、須恵器のほかに石製紡錘車、鉄製農工具、鉄製紡錘車、鉄鏃、銅製鉈尾、銅製鈴などの金属器のほか

に皇朝十二銭の一つである万年通宝が出土している。

墨書土器は竪穴住居址と掘立柱建物から多数出土しており、そのなかに「佛」（五三号住居址）「寺」（二八号住居址）「穴・酒坏」（六一号住居址）などの文字がみられ、所属時期はいずれも九世紀中頃と推定されている。

「穴・酒坏」の墨書文字は土師器坏の体部外面に「穴」字が、底部外面に「酒坏」字が墨書されており、報告書では「穴」は穴穂部などの集団に関係する語の一部かと推定されている。

この遺跡を含めた鹿子遺跡群では仏堂的な遺構は発見されていないが、同じ遺跡群の内野第Ⅱ遺跡の竪穴住居址（一八号住居址）からは鉄鉢形土器が出土しており、中鹿子第2遺跡で出土した「寺」「佛」の墨書土器と関連するとみられている。^③

⑭ 「酒坏」・浄水寺址（石川県小松市）^④

浄水寺跡は平野に近い山間に立地する山林寺院であり、調査によって、平安時代～室町時代にかけて営まれていたことが判明した。検出遺構としては溝や掘立柱建物があり、土師器を主体とした出土遺物とあわせて、浄水寺址は時期的には九世紀後半に成立したと考えられる。その主たる根拠は溝などから大量に出土した墨書土器のなかに、「浄水寺」と記された資料が多数認められる点にある。出土遺物には銅三鈷鏡、銅鉢、金銅莊嚴具、金銅軸端、僧形木像、僧形板絵、板塔婆などの仏教関係遺物やその他には仏像・法具（三鈷杵か）と塔婆などの仏教的図像を土器に墨書で描いた戯画土器などが出土しており、これらは寺院址であることの証左となっている。その他の出土遺物では越州窯青磁・長沙窯水注や刀装具である兜金の他に鳳凰形装飾などの金属製品などが出土しており、これらによって、報告書では平安時代の浄水寺が有力な地方の在庁官人によって庇護のもとに成立した山間寺院と位置づけられている。

墨書土器のなかには、土師器の台付椀の高台内に「酒杯」(Ⅲ―3―4テラス大溝)の墨書が認められる。浄水寺址における墨書土器の盛行時期は九世紀後半から一〇世紀後半頃である。この浄水寺址出土の「酒杯」に関して、どのような階層や属性の人士が飲酒していたのかについては不明とするほかはないが、これまで注目されることのなかった古代の北陸地域の山間寺院においても、飲酒が行われており、そのための器が存在したことが知られた。

⑮「佛進郷坏天平・日奉」・大江遺跡第二〇次調査区(熊本市)⁽³⁵⁾

大江遺跡群は熊本平野北側の白川下流左岸にあたる台地の末端部に位置する。小規模な発掘調査が繰り返行われているなかで、第二〇次調査では遺跡の南東端にあたる部分から東西方向に延びる道路遺構とそれを挟んだ二棟の掘立柱建物址が検出された。出土遺物は八世紀代とみられる土師器・須恵器と瓦などであった。そのなかで道路面から出土とした土師器に線刻文字がある資料がみられ、とくに土師器坏の体部外面には焼成前にヘラ描きで「佛進」とあり、それに続いて、「郷坏天平」「日奉」という焼成後に施された刻書文字がある。ヘラ描き文字の「佛進」と刻書「郷坏天平」「日奉」とは、それぞれ焼成前と焼成後の書写であり、連続的に続く文ではないと考えられる。また、刻書文字も途中で欠落した部分があり、破片として接合しない可能性もあり、これらの語句の間に別の語句または文が入ると思われる。「天平」の語句について、報告書では単純に元号を示すかどうかについて疑義が呈されている。

この遺跡から出土したその他のヘラ描き文字としては「林寺」「田井寺」⁽³⁶⁾などがあり、年代は概ね八世紀中頃から後半頃とみられている。報告書では、これらを寺へ寄進された器物と推定している。「佛進」ヘラ描き土器の用途については、酒杯とは断じられないが、文字の意味としては仏に奉じた容器であると考えられ、「佛」字文字資

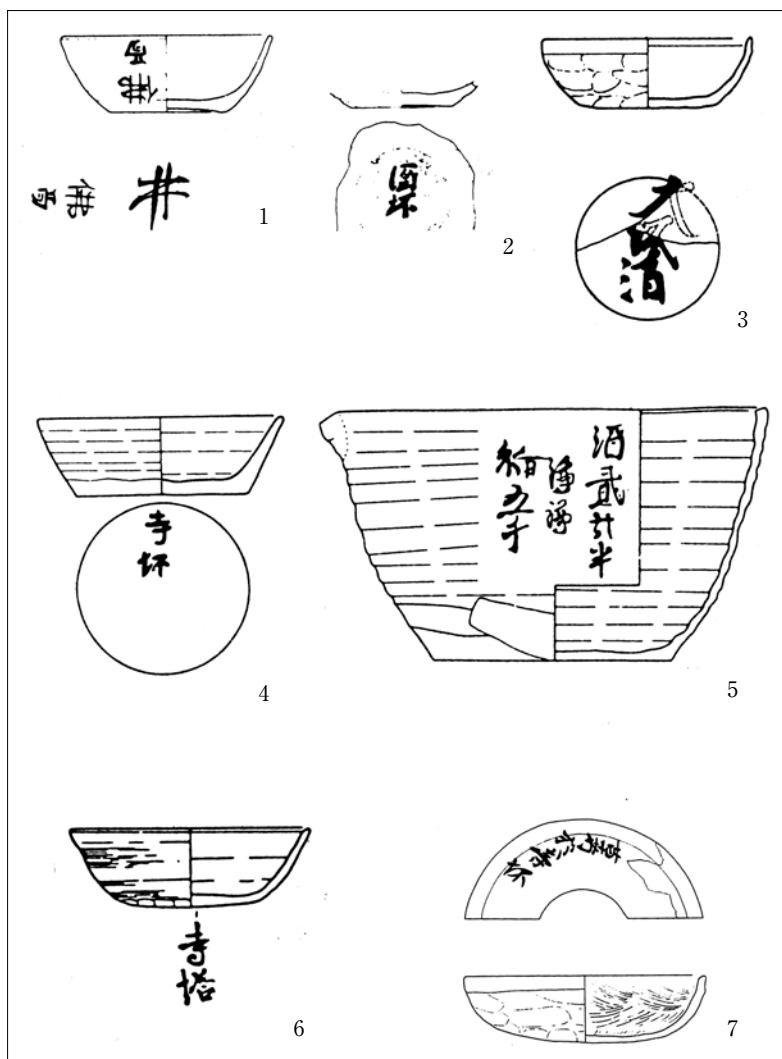


図1 仏教関係墨書と同一遺跡から出土した「酒」字関係墨書土器 (S = 1/4)

1、2 庄作遺跡 3、4 開護台遺跡 5 永吉台遺跡群西寺原地区 6 草刈遺跡

料が多出している東国以外での類例として重要な資料である。

①⑥「寺杯」「六寺」「寺」・洗切遺跡（熊本県八代市）⁽²⁷⁾

洗切遺跡は八代平野の南部に位置する球磨川下流域の三角州に立地する。旧地形においても、海岸近くの河川に面した場所に形成された遺跡と考えられる。これまで部分的な発掘調査が行われ、古代と中世遺構の複数の時期にわたる遺構が検出されている。古代の遺構としては奈良時代後期から平安時代前期にかけての炉址、集石が検出されている。周辺の包含層から土師器や三彩片が出土しており、そのなかにはヘラ描き文字が認められる資料がある。ヘラ描き文字には「寺杯」「六寺」「寺」などの字句があるが、報告書の考察では寺の字は寺院または役所を意味するため、この文字を寺院との関係のみで理解すべきではないと予察している。

これらの墨書土器は包含層から出土した資料であり、遺構に帰属するものではないため、その位置づけは難しいが、他地域の例を参照すると、近傍に仏教関係施設が存在し、そこで酒杯として用いられていた容器であった可能性が考えられる。

以上のような例とは別に官衙関係遺跡から出土する墨書土器のなかに明らかに用途を示すものが認められる。この種の類例は多いが、これら上記の「酒」と仏教関係字句の墨書が出土する遺跡とは、その性格が異なることは明らかであって、本論の目的とは異なるために、ここでは典型として、出雲雲国土庁跡出土の土師器杯に「酒杯」と墨書された例をあげるにとどめたい。

上記のように、「酒」字およびこれを含む字句が墨書されている土器と「佛」「寺」などの仏教関係の文字が墨書されている土器が伴出している遺跡をあげ、検出遺構や出土遺物から各々の遺跡の属性を瞥見してきた。

次にこれらの遺跡が示す特質を分析してみたい。調査面積が狭小であるため不明の遺跡を除外すると、ここま

で地域ごとに挙例した遺跡の属性を勘案して類型化すると、次の三つに大別される。

I 集落遺跡またはその近傍に所在し、仏教関係遺構および仏具などの仏教関係遺物を伴う―庄作遺跡、江原台遺跡、滝東台遺跡、白幡前遺跡、井戸向遺跡、萩ノ原遺跡、草刈遺跡

II 集落遺跡で仏教関係遺構および仏具などの仏教関係遺物を伴わない―開護台遺跡、一夜山遺跡C地区、村田居山遺跡、永吉台遺跡群西寺原地区、中鹿子第2遺跡

III 諸国国分寺およびその関連ないしは周辺遺跡―下総国分寺跡

IV 山間寺院を含む寺院跡―浄水寺址

これらのなかで、Iの類型は、研究史上では「村落内寺院」と呼ばれ、掘立柱建物の内部に瓦塔や瓦堂を置いた施設であったことがわかつている。この種の遺跡については、本論では掘立柱仏堂という呼称を用いたが、仏堂内周辺あるいは周辺に置かれた燈明用の土師器坏などとともに「酒」字を含む墨書のある土器が出土している類型として整理される。

IIの類型については、細かくみれば、さまざまな遺跡形成の背景があり、たとえば永吉台遺跡群西寺原地区で出土した「佛」「僧」などの墨書土器に関しては、同じ遺跡群とされる遠寺原地区で瓦塔を納めたと考えられる掘立柱仏堂が検出されており、この遺跡との関係が考えられる。IIの類型とした遺跡のなかには、このように近傍に仏教施設が存在が想定される場合があり、それ以外の遺跡とは区別する必要がある。それ以外の遺跡に関しては、未調査の周辺遺跡との関連や移動する仏教者との関係を想定して、今後さらなる検討を行う必要がある。

分布については、I類型に属する遺跡がほぼ東国を中心とするのに対して、II類型も中心となる地域は基本的に同様であるが、他地域にも広がる可能性がある。また、III類型は国分寺・国分尼寺であるから、当然ながら

諸国に及ぶ。Ⅳ類型も同様であるが、寺院の規模や属性によって、墨書土器の傾向も変化することが予想される。

三、仏典からみた仏教儀礼と飲酒

日本古代における仏教と酒の関係については、当然ながら僧尼の飲酒に対する戒律とその施行の実態が問題となり、ここではそれと関連する仏教の思想や戒律における酒の位置づけについて、漢訳仏典にみえる飲酒の内容を概観する。

周知のように僧尼令飲酒条には僧尼の飲酒に対する規制が記されている。次節で詳説するが、この規定では僧尼が酒を飲んだり、肉を食べたり、五辛（五種類の辛味のある蔬菜）を食べたら、苦使という罰を三十日受けるという内容であった。

このような僧尼の飲酒に対する規制の背景には、当然ながら仏教の戒律における不飲酒がある。仏教における飲酒の不可については、戒律の一つである不飲酒戒として論じられることが多い。仏教における不飲酒戒とその文献的背景と日本および中国における社会的実態については藤原暁三^②、道端良秀^③、杉本卓洲の三氏による研究があり、本論でも、これらの論考に導かれて、日本の古代集落における酒を用いた仏教行事の実修について論ずることとする。

仏教における飲酒については、その過失について、すでに原始仏典とされる『スッタニパータ』に説かれる。すなわち、「ダンミカ経」には次のような飲酒の過失が説かれている。

また飲酒を行ってはならぬ。この（不飲酒の）教えを喜ぶ在家者は、他人をして飲ませてはならぬ。他人

が酒を飲むのを容認してもならぬ。―これは終に人を狂酔せしめるものであると知つて…。⁽³¹⁾

けだし諸々の愚者は酔のために悪事を行い、また他の人々をして怠惰ならしめ、(悪事を) なさせる。この禍いの起るものとを回避せよ。それは愚人の愛好するところであるが、しかし人を狂酔せしめ迷わせるものである。⁽³²⁾

『スッタニパータ』では、このように酒を人に勧めて飲ませる事にとどまらず、他人が酒を飲むこと自体を容認してもいけない、と説いている。すなわち飲酒について、自他に対して大変厳しい態度をとるべきことが説かれているのであって、これに示されるように原始仏典においても、飲酒に対する不寛容の姿勢がみえる。

そもそも仏教における不飲酒戒の根本となる仏典の内容として、『四分律』『五分律』『律蔵』などにみえる仏弟子サーガタ(娑竭陀、沙竭陀、修伽陀、荼竭等他)の話がある。

たとえば『四分律』の戒相には、比丘の二百五十戒と比丘尼の三百四十八戒が数えられているが、そのうち比丘のとして不飲酒戒は単墮戒九十のなかの五十一に置かれている。そこでは、次のような戒律制定の因縁と仏世の事実をあげて、戒を制している。すなわち、支提国のバツダヴァティカーにおいて神通力で悪童を改心させた仏弟子のサーガタは、コーサンビーに赴き人々から供養された酒を飲んで酔って臥すと、釈尊は僧たちに介抱させ、サーガタを「今の如きは小龍をも降伏すること能わず。況や能く大龍を降伏せんをや」と非難し、飲酒には十の過失があることを示したのちに、「これより以降は出家者が酒を飲む事は禁止である」として、釈尊はこれにより飲酒は波逸提なりと制裁したといふ。⁽³³⁾

ここでの飲酒の十失は次のように具体的にあげられている。

一 顔色が悪くなる。

二 体力が減少する。

三 視力が減退する（目がうつろになる）。

四 怒り散らす。

五 生業に支障をきたす。

六 病気になる。

七 鬭争を引き起こす。

八 良い評判はたたず、悪評が立つ。

九 智慧が減少する。

十 死んで後、地獄・餓鬼・畜生の苦しみ多大なる境涯いずれかに生まれ変わる³⁴。

これにとどまらず、不飲酒戒の示された単墮戒九十を含む二百五十戒は出家修行者の行うべき戒律とされている。すなわち東晋代以降の成立とみられる現存の『四十二章経』では、はじめの二章で出家者について述べられており、そこには次のような箇所がある。

仏言えらく。親を辞して家を出でて道を為す。名づけて沙門という。常に二百五十戒を行い、四真道の行を為し、進志清浄にして阿羅漢となる³⁵。

ここでは親縁な人々との縁を切って出家する沙門は二百五十戒を受持することが端的に示されている。ここい

う沙門は正しくは比丘であり、また完整な行文は中国的であり、かつ仏教の出家者に対する知識を持ち合わせない人々を対象として書かれたものとする見方もある。^⑤ いずれにしても、漢訳仏典における出家者の認識とすることができよう。

いっぽう、『長阿含經』善生經にも、飲酒の失として以下の六条があげられている。

- 一 財産を失う
- 二 病を生ずる
- 三 鬭諍する
- 四 惡名が流布する
- 五 恚怒（いかり）が暴（にわか）に生ずる
- 六 智慧（ちえ）日に損なう。

ここにあげられている飲酒の失は、きわめて社会的な要素といえよう。

大乘仏典における飲酒の過失については、まず、『大智度論』が引かれる。この經典では釈迦が難提迦という優婆塞に語る形で酒に関する三十五の過失が説かれており、その最後に以下のように説かれている。

酒は覺知の相を失い、身色濁りて惡し。智心動じて亂れ、慚愧すでに劫さる。念を失つて瞋心増し、飲び失つて宗族を毀つ。かくの如きは飲むと名づくといえども、実に死毒を飲むとなす。まさに瞋（いか）るべからざるに瞋り、まさに笑うべからざるに笑い、まさに哭くべからざるに哭き、まさに打つべからざるに打ち、まさに語るべからざるに語るは、狂人と異なること無し。諸の善功德を奪う。愧を知る者は飲まず。^⑥

このような出家者の戒律のほかに、仏教において在家の信者が守るべき基本的な五戒があることも周知のとおりであり、それは不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒である。

また、『梵網經』にも次のように四十八輕戒の一つとして飲酒戒が示されている。

もし仏子、故（ことさら）に酒を飲まんか、しかも酒の過失を生ずること無量なり。もし自身の手ずから酒器を過（わた）して人に興（あた）へて酒を飲ましめば、五百世まで手無し。何（いか）に況（いわん）や自ら飲まんをや。一切の人を教へて飲ましめ、及び一切衆生に酒を飲ましむることを得ざれ。況や自ら酒を飲まんをや。一切の酒を飲むことを得ざれ。もし故（ことさら）に自ら酒を飲み、人を教えて飲ましめば、輕垢罪（きょうくざい）を犯（ほん）ず^③。

もし仏弟子が、故意に酒を飲めば、数えられないほどの酒による過失が起こる。もし自ら酒器を他人にわたし酒を飲ませれば、五百世にいたるまで手の無いものとして生まれ変わる。ましてや自分が酒を飲むなど論外である。一切の人にあつても酒を飲ませてはいけない。生きとし生けるものに酒を飲ませてはならない。自分が酒を飲むなど、もつてのほかである。いかなる種類の酒であつても飲んで是不なる。もし故意にみずから酒を飲み、他人に飲ませれば、惡しき行い（十重禁戒に比較すれば輕微な罪）を犯したことになる。

同じく『梵網經』の十重禁戒には酤酒戒として、飲酒はもとより、酒を売る行為である酤酒さえも禁じられている。

もし仏子、みずから酒を酤（う）り、人に教えて酒を酤らしめば、酒を酤る因、酒を酤る縁、酒を酤る法、酒を酤る業あり。一切の酒を酤ることを得ざれ。これ酒は罪を起こすの因縁なり。しかも菩薩はまさに一切衆生の明達の慧を生ぜしむべし。しかるを反つて更に一切衆生の顛倒の心を生ぜしめば、これ菩薩の波羅夷罪なり。⁽³⁹⁾

もし仏弟子が、自分から酒を売り、他人に酒を売らせれば、そこに酒を売る原因、酒を売る条件、酒を売る法、酒を売る行いがある。いかなる種類の酒であれ売ってはならない。酒は罪を犯す原因・条件である。そもそも菩薩は生きとし生けるものすべてが、涅槃に向かう智慧を生じるよう活動すべきものである。にも関わらず、（酒を売り、飲酒させることによって）生きとし生けるものに逆様な心を起こさせれば、これは菩薩として、死罪に等しい許されぬ罪である。

このような飲酒の戒は、仏教を中心とした古代インドの思想においては、時代や地域および場合によって、一律の禁戒が求められたわけではないというが、一般に飲酒は罪惡視され、禁じられる傾向にあったと認識されている。⁽⁴⁰⁾ 飲酒戒が記されている『梵網經』『大智度論』などの仏典は奈良時代には存在し、講学や写経が行われていたことから、⁽⁴¹⁾ これらは少なくとも南都とその周辺においては知悉された經典であったとみられる。このような奈良時代における仏典の流布の状況も勘案して、現今における仏教および仏典における飲酒観に関する研究を参照すると、それらの大要を掲げることによって飲酒そのものが禁戒とされ否定されていることを示した。

四、日本古代における仏教と酒

奈良・平安時代の遺跡から出土する仏教関係の字句とともに出土する墨書土器に「酒」字がみられることは、すでに多くの類例をあげたが、同時代の文献史料にみられる仏教信仰および仏教政策において、飲酒はどのように記されているかをみておきたい。

まず、奈良時代には、いうまでもなく、律令制下で僧尼令によって、僧尼令の全二七条のなかには僧尼の寺院以外での別住、綾羅錦繡の衣を着用、僧尼の交通などの禁止とともに飲酒五辛の禁止が規定されている。周知のように養老令のうち僧尼令飲酒条には僧尼の飲酒に対する規制が記されている。

凡僧尼、飲酒、食肉、服五辛者、卅日苦使。若為疾病藥分所須、三綱給其日限。若飲酒醉乱、及与人闘打者、各還俗。

(僧尼令 第七 飲酒条)^①

すなわち、僧尼が、酒を飲み、肉を食い、五辛（五種類の辛味のある蔬菜）を服したならば、三十日苦使する、とある。苦使とは僧尼のみに科せられる刑罰であって、その内容は經典の書写など仏への功德となる労役である。ただし、疾病の薬分として用いるならば、僧尼も薬として酒を飲むことができるが、その場合は寺の三綱が飲む期間を定めるという規定がある。この場合、もし酒を飲んで酔い乱れ、また人と闘打したならば、各々還俗とす

る、と定められている。

この規定によると僧尼に対して、酒は薬用としてのみ許され、薬用に用いるに際しても、あらかじめ三綱の承認を得て、日限を決めて許された以外には絶対禁酒とされ、万一、酔乱に及べば還俗とされるほど律令制においては、僧尼の飲酒が厳しく制せられた。

このような禁令にも関わらず、僧尼の飲酒が行われたようで、平安時代いたると、貞観八年（八六七）六月の詔にみられるように僧侶の飲酒贈遺の禁令が発せられている。

勅。頃年習俗澆薄、飲宴無度。損人費物、職見之由。是以、今年正月廿三日、殊施嚴科、重加禁止。唯爲俗人、之制淫費。即於僧侶、有何疑殆。然恐有破戒濫行之、違佛教乖王法。非因療病、妄自飛觴、不知有識之嘲、無護法之。宜令所司牒示僧綱、下知諸寺、嚴加禁遏、勤致清慎。若有違越者、必録其名、令送所司、科罰一如法條。又出家之人、理無生產、唯仰一鉢。當有何蓄。而今或聞、複試業之時、資供豐盈、贈遺煩費。是以身素清貧、無階營設者、雖有高才、難果其業。豈云釋迦之元意、緇徒之淑行乎。自今而後、宜禁僧侶飲酒及贈物。若有犯、其罪准上。僧綱三綱、知聞不糾、及隱忍不言、即与同罪。

『三代実録』卷十三・貞観八年（八六六）六月四日丁丑^⑤

これによると、この禁令が出された頃には、習俗が澆薄し、宴飲に度がなく、人を損ない、物を費やしており、これによって禁止したが、俗人をしてこれを制しても、僧侶において、疑い恐れる者がなく、破戒乱行の輩が仏法に違い、王法にそむいて、療病に因るにあらずして、みだりに觴すなわち杯を飛ばして、有識の嘲りを知らず、

語法の厭を顧みることがない。そのため所司は牒をもって僧綱に示し、諸寺に下知して、厳しく禁遏を加え、勤めて清慎を致しむべし、とある。そして、これに違うと必ずその名を録して、所司に送らしめ、罰を加えるところ、僧尼の飲酒に対しては、懲罰をもってこれに臨むことが記されている。加えて、僧侶への贈物をも禁じており、僧尼を統制すべき僧綱や三綱がこれらを知って糺さなければ同罪としている。

このように律令制下で僧尼には飲酒が禁止されていたが、寺院や僧尼と酒との関わりは存在し、やがて神仏習合が展開するなかで、さらに進んでいくと説明されることが多い。その典型的な事例として、春日神社の神酒は興福寺において、日吉神社に奉る神酒は叡山で醸造されたことなどがあげられる。それ以外にも、史上に著聞するのは中世の銘酒として知られる天野酒が河内の天野寺で醸されたことである。また、東大寺要録の諸院章には北厨南厨には一百四十二口の甕があることで知られた。一般に中世のみならず日本における醸造史ひいては産業史のなかでも、寺院における酒造は重要な位置をしめしているとされ、醸造学の立場から、同様の見解が示されている。⁽⁶⁾

ここまでふれてきた日本古代における僧尼の飲酒や寺院における酒造について、まとめるならば、律令制においては、基本的に僧尼の飲酒は禁止されていたが、実態としては僧尼の飲酒は止むことはなく、中世にいたっては寺院が有力な醸造所となるにいったと概観することができよう。

ただし、これは奈良・平安時代の僧尼および寺院における飲酒の禁止とそれに対する実態であって、集落次元における仏教と酒の関係は不明とする他はなかった。このような奈良・平安時代の僧尼や寺院における飲酒や醸造の実態は、もとより同時代の仏教の様相を考えるに際しては把握すべき事項である。このような一般的な見方に対して、本論で行ってきた奈良・平安時代の集落における仏教信仰の実修に関しての具体相を次に示したい。

五、古代集落における仏教儀礼の様相

ここまで仏教における飲酒の禁について、戒律や仏典にみえる例話および日本古代の史料をもとにみてきた。このような仏教における飲酒に対する認識をもとに、ひるがえって、最初に奈良・平安時代の遺跡から出土した仏教関係の語句や文字と伴出した「酒」字墨書土器について検討していきたい。

はじめにみたように、ここで問題としている「酒」字を含む墨書土器が出土する状況としては、掘立柱仏堂といわれる小規模な仏教施設に伴ったり、あるいは「佛」や「寺」字を含む墨書土器と伴出し、また仏具などが出土することから、土師器の坏を主体とした容器を用いて「酒」の供献が行われていたことがわかる。

そのなかでも、掘立柱仏堂とよばれるような集落の内部や近傍に存在する仏教施設や仏具が出土する集落遺跡からは、「寺」などの仏教的語句が墨書された土器とともに「酒」や「酒坏」の墨書のある坏形土器が出土している。さらに「寺坏」「佛酒」などの墨書の存在から、古代において、「寺」と認識されていた場所において坏に酒を注ぎ備え、かつ「佛」に対して直接に酒を献じていたことがわかった。すなわち、古代の集落およびその周辺の仏教信仰では儀礼や行事の実修過程において、酒を用いていることが動かしがたい事実であることが明らかにあった。

元来、原始仏教のなかにも酒の害毒を説く叙述があり、さらに仏教の展開のなかで戒律として飲酒を禁じ、忌避する思想が醸成されてきたことは、前項で縷々みたとおりである。また、日本古代においても、奈良時代には僧尼の飲酒が令制のもとに禁じられていたが、平安時代には僧尼の飲酒の弊害に対して、これを禁ずる勅が出さ

れることになった。さらに平安時代の後半から以降は神仏習合の展開によって、僧尼や寺院と神社で用いる酒の関係が深まり、中世においては寺院が有力な醸造所として機能していた

このような通説的な見方に対して、本論では、「佛酒」墨書土器に象徴されるように、すでに奈良時代後半の東国の集落と関係する仏教関係施設の遺構から、「佛」と「酒」字を含む墨書土器が並存または伴出する例があり、それは傾向というに留まらず、明らかに類型とされるほどの顕著な事実であることを示した。

このような酒を供献する仏教儀礼は、本論で挙例した遺跡の属性から類型化すると、掘立柱仏堂とそれに近接する集落遺跡（本論のⅠ類）、や仏教関係遺物が出土する集落遺跡（同・Ⅱ類）、そして国分寺を主とする寺院遺跡（同・Ⅲ類）において、共通して行われていたと考えられる。たとえば、掘立柱仏堂の類型に入る典型的な例としては、江原台遺跡・滝台東遺跡・永吉台遺跡・白幡前遺跡・萩ノ原遺跡などがあげられる。また、仏教関係遺物が出土したⅡ類とした類型では庄作遺跡・一夜山遺跡群C地区などがあげられる。これらの類型からは共通して、集落およびそこに住んだ一般民の次元における仏教信仰とそれに伴う酒を用いた儀礼の存在が推定される。

いっぽう、国分寺を主体とした古代寺院そのものから「酒」字墨書土器が出土した典型例としては、「講院」「酒」の墨書土器が出土した下総国分寺跡があげられる。ここでは「酒」字墨書土器は「講院」墨書土器と近接した遺構で出土しており、ともにその年代は八世紀後半から九世紀前半頃と報告されている^④。

「講院」墨書土器は、このほかでは陸奥国分寺（宮城県仙台市）、信濃国分寺跡（長野県上田市）、上総国分寺（千葉県市原市）、下総国分寺跡（千葉県市川市）、下野国分寺（栃木県国分寺町）、遠江国分寺跡（静岡県磐田市）、安芸国分寺跡（広島県東広島市）などで出土しており、所属時期は九世紀頃とみられている。

諸国国分寺跡から出土する「講院」墨書土器は国分寺に住む僧のなかでも、法会を行う際に、もっとも重要な

役割を担う「講師」と呼ばれる僧が住んだ場所を示すものとみられている。^④

下総国分寺跡では「講院」の墨書土器とともに「酒」字墨書土器が国分寺の機構として重要な位置を占める部分から出土していることによって、国分寺の講師が住んだ施設またはその近傍において、「酒」を用いた行事や儀礼が行われていた可能性がある。すでに縷々述べたように「酒」字墨書土器は用途としては酒杯であり、この出土は国家が規定する地方における公的な仏教施設として最たる国分寺においてさえ、酒杯を用いた儀礼や行事が実修されていたと考えられるのである。

このようにみると、奈良・平安時代の集落次元行われる仏教信仰で酒杯が献じられるのみならず、国分寺においてさえも、酒杯を用いた儀礼や行事が存在したのであって、これらの点からは明らかに原理的な仏教の禁戒が変容を経ているといわねばならない。

いっぽう、同時代資料で「酒」字を含む文字資料としては武蔵国府関連遺跡出土の「孝酒」墨書土器があげられる。これは奈良時代の火葬簿に伴う遺物であって、筆者はかつて、この「孝酒」墨書土器の思想的背景について論じたことがある。その時には、この「孝酒」墨書土器が儒教的思惟である孝を表す文字を象徴的に記しながら、一方では根源的意味において仏教的葬法である火葬と融合し、かつ「酒」字を含む墨書に示される意味内容は奈良時代から平安時代に東国で盛行した「酒」を捧げる習俗の存在を示すものと考えた。^⑤

この武蔵国府関連遺跡出土の「孝酒」墨書土器は、本論でとりあげた庄作遺跡出土の「佛酒」墨書土器と墨書された土器の器種や器形および墨書の容態が類型的であることが注目される。これらの類型的な墨書土器からは、孝を標榜するに際しても、仏に対して献ずるにも、酒をもつてこれにあて、坏に盛り注いで供献していたことが推定される。これらの例によって、古代の東国においては、葬礼における儒教的な思惟としての「孝」であるか、

掘立柱仏堂などで行われた仏教的儀礼であるかを問わず、酒を献じ、供えて行う信仰儀礼があったことがわかる。すなわち、儒教や仏教という思想や宗教の次元をとわず酒を供献する儀礼の実修があったとみられる。このように酒を供献する儀礼行為の基盤の上に、儒教的な思惟や仏教的な信仰が重層した結果としての具象が、「孝酒」や「寺坏」・「酒」、「佛酒」などの土器に記された墨書であると考えられる。

そして、このような東国古代集落における「酒」を用いた祭儀や行事が存在し、それが仏教的行事あるいは儀礼においても行われたことを想定させるのが、庄作遺跡出土「佛酒」墨書土師器坏である。この墨書は正位の坏の方向とは逆に底部から書かれていることから、坏を反転した状態つまり裏返しにして使用したことがわかる。このような土師器坏の使用法としては、仏教儀礼に用いられたとみられる「酒」字墨書土器の分布地域においては、馬場遺跡（千葉県佐原市）で造り付けカマドの上に底部を上にした逆位で土師器坏が置かれていたことから、カマドに関する祭祀と考えられている事例が参考になる。^⑧ すなわち、外底部に記された多種の墨書文字のなかでも、カマドに関する墨書がある土器は、実際のカマド内の祭祀に用いられる場合は逆位で用いられることがあったと想定される。このことを敷衍すれば庄作遺跡で出土した土師器坏外底部に墨書された「佛酒」の語は、馬場遺跡での土師器坏の用法と同じく、祭祀行為に際して逆位で用いられたことが想定される。カマドの祭祀に用いられたこれらの土器と、同じく逆位で用いられた庄作遺跡で出土した「佛酒」墨書土器とを比較すると、やはり同様の用法を想定されることは許されよう。

このような同時代かつ同地域における祭祀または儀礼の事例をみてわかることは、「佛酒」墨書土器に象徴される仏教儀礼や行事と関連する古代東国出土の「酒」字墨書土器は、同一地域で行われていた他の祭祀と同類の祭祀行為の一環であり、これに仏教信仰が重層した結果として位置づけられるのである。

結 語

ここまで本論で述べきった内容について、論点を整理して、結語に代えることとする。

まず、「佛酒」「寺杯」などに代表される仏ないしは仏教施設に酒を用いたことを直接に示す墨書土器が存在することを示すために詳細な報告書が刊行されている遺跡を中心として主要な例をあげ、これらを類型化した。

次に仏教の思想や戒律における酒の位置づけについて、漢訳仏典にみえる飲酒の内容と「酒」字墨書土器と同時代史料である奈良・平安時代の僧尼に対する飲酒の禁止や実態を概観し、基本的に仏教および仏典における飲酒観としては、飲酒そのものが禁戒とされ否定されていることを示した。

さらに墨書土器と併行する奈良・平安時代の文献史料にみられる仏教信仰および仏教政策において、飲酒は記事やそれに関する研究を瞥見し、律令制においては、基本的に僧尼の飲酒は禁止されていたが、実態としては僧尼の飲酒は止むことはなく、中世にいたっては寺院が有力な醸造所となるにいたったことという現下の研究動向を示した。

以上のような仏典の戒律や同時代の僧尼や寺院での飲酒の実態と中世にかけてのその意味の変容を踏まえて、奈良・平安時代の遺跡から出土した仏教関係の語句や文字と伴出した「酒」字墨書土器を検討し、八世紀後半から九世紀前半にかけて、地域としては東国を中心として、集落に住む民衆の次元で、仏教信仰に伴う祭儀や行事に酒を献ずる行為が実修されていたことを証した、そして、このような仏教行事に酒を献ずる行為は、一部の国分寺などの国家的な仏教施設でも行われたことも知られた。そして、庄作遺跡で出土した「佛酒」墨書土器に顕

著なように、その祭儀の実修方法には、同時代のカマドの祭祀にみられる在地的祭祀行為との共通性があるという一面を指摘した。

このような同時代かつ同地域における祭祀または儀礼の事例をみてわかることは、「佛酒」墨書土器に象徴される仏教儀礼や行事と関連する古代東国出土の「酒」字墨書土器は同一地域で行われていた他の祭祀と同類の祭祀行為の一環であり、これに仏教信仰が重層した結果と位置づけた。

本論では出土例の集中する東国の事例を中心に考察したが、仏教関連遺構やその周辺から出土する「佛」「酒」字墨書土器の分布は挙例したように九州にも及んでおり、今後はそれらの地域との比較も含めて、相対的な検討を行うことにより、奈良・平安時代の集落次元での仏教信仰の実態を明らかにしていく必要がある。

《注》

- (1) 平川南『墨書土器の研究』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
高島英之『古代出土文字資料の研究』（東京堂出版、二〇〇〇年）
- (2) 平川南『古代人の死と墨書土器』『墨書土器の研究』（前掲注1）
- (3) 宮田安志『仏具出土集落の出現とその背景——古代東国を中心として——』『論集しのお考古——目黒吉明先生頌寿記念——』（論集しのお考古刊行会、一九九六年）
- (4) 財団法人千葉県文化財センター編『古代仏教遺跡の諸問題——重要遺跡確認調査の成果と課題1——』（『千葉県文化財センター研究紀要』一八、一九九七年）
- (5) 財団法人千葉県文化財センター編『古代仏教遺跡の諸問題——重要遺跡確認調査の成果と課題1——』（前掲注4）
阪田正一『古代房総の民衆と仏教文化』『考古学の諸相』（坂詰秀一先生還暦記念会、一九九六年）
- (6) 荒木志伸『寺は施設名か——寺の外から出土する「寺」墨書土器——』（『古代学研究紀要』一一、二〇〇九年）
- (7) 荒木志伸『墨書土器からみた山寺』（『季刊考古学』一二一、二〇一二年）

- (8) 山武考古学研究所編『小原子遺跡群』(芝山町教育委員会、一九九〇年)
なお、以下の墨書の表記は一個体に複数の墨書がある場合は「・」を用いて示した。
- (9) これらについては平川南氏による一連の研究がある。
平川南『墨書土器の研究』(前掲注1)
- (10) 成田市開護台遺跡発掘調査団編『成田市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(成田市開護台遺跡発掘調査団・成田市教育委員会、一九九〇年)
- (11) 江原台第1遺跡発掘調査団編『江原台―土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡2区の発掘調査報告書―』(佐倉市教育委員会、一九七九年)
- (12) 香取郡市文化財センター編『一夜山遺跡群―千葉県佐原市』(小見川町・香取郡市文化財センター、一九九四年)
- (13) 山武郡市文化財センター編『油井古塚原遺跡群』(東千葉カントリー倶楽部・白里町〔千葉県〕・山武郡市文化財センター、一九九五年)
- (14) 香取郡市文化財センター編『村田居山遺跡』(香取郡市文化財センター、一九九七年)
- (15) 君津郡市文化財センター編『永吉台遺跡群・千葉県袖ヶ浦町』(君津郡市考古資料刊行会、一九八五年)
- (16) 千葉県文化財センター編『八千代市白幡前遺跡』(住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、一九九一年)
- (17) 千葉県文化財センター編『八千代市井戸向遺跡』(住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、一九八七年)
- (18) 大野康男『萱田遺跡群』千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』資料編考古3(千葉県、一九九六年)
- (19) 日本文化財研究所編『千葉県萩ノ原遺跡・房総地方の古代寺院址研究』日本文化財研究所文化財調査報告5(日本文化財研究所、一九七七年)
- (20) 天野努・栗田則久・田形孝一『出土文字資料と地名』(千葉県史研究)二、一九九三年
田形孝一ほか『出土文字資料と地名―草刈に寺はあったのか?―』(千葉県史研究)一、一九九四年
- (21) 千葉県教育振興財団編『市原市草刈遺跡(D区・E区)』(千葉県教育振興財団、二〇〇六年)
- (22) 市立市川考古博物館編『下総国分寺跡―平成元々五年度遺跡発掘調査報告書』(市立市川考古博物館、一九九四年)
- (22) 千葉市文化財調査協会編『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』(東急リゾートサービス勝浦・東京急行電鉄株式会社、一九九二年)
- (23) 津田芳男『内野第Ⅱ遺跡』『千葉県の歴史』(前掲注18)

- (24) 石川県立埋蔵文化財センター編『浄水寺跡発掘調査報告書』第1分冊浄水寺墨書資料集(石川県立埋蔵文化財センター、一九八九年)
- 櫻井甚一「福水遺跡と浄水寺遺跡出土の仏具」加能史料編纂委員会編『加賀・能登 歴史の窓』(青史出版、一九九九年)
- (25) 石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター編『浄水寺跡』(石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、二〇〇八年)
- 熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財調査年報一昭和三十九年度・平成三年度』(熊本市教育委員会、一九九五年)
- 熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集一平成九年度・平成一〇年度』(熊本市教育委員会、二〇〇〇年)
- (26) 熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財調査年報一昭和三十九年度・平成三年度』(熊本市教育委員会、一九九五年)
- (27) 洗切遺跡調査団編『洗切遺跡調査報告一八代高等職業訓練校並びに八代市働く婦人の家建設に伴う熊本県八代市所在の埋蔵文化財調査一』(八代市、一九八二年)
- (28) 藤原晩三『仏教と酒』(少年禁酒軍、一九三三年)
- (29) 道端良秀「中国仏教と禁酒運動」(『大谷大学研究年報』一五、一九六三年)
- (30) 杉本卓洲「第十章飲酒戒考」『五戒の周辺ーインドの生のダイナミズムー』(平楽寺書店、一九九九年)〔初出は一九八五年〕
- (31) 中村元訳『ブッタのことは 改訂版』(岩波書店、一九八四年) 八二―八三頁
- (32) 中村元訳『ブッタのことは 改訂版』(前掲注31) 八二―八三頁
- (33) 杉本卓洲「第十章飲酒戒考」(前掲注30)
- (34) 『四分律』卷第一六
- 仏告阿難、凡飲酒者有十過失。何等十、一者顔色惡、二者少力、三者眼視不明、四者現瞋恚相、五者壞田業資生法六者増致疾病、七者益門訟、八者無名稱惡名流布、九者智慧減少、十者身壞命終墮三惡道。阿難是謂飲酒者有十過失也。(『大正新修大藏經』卷第二・六七一頁上段)
- なお、以下の仏典の読み下し、現代語訳は『国訳一切経』等を参考とした。
- (35) 『四十二章經』上卷
- 仏言、辭親出家為道、名曰沙門、常行二百五十戒、為四真道行、進志清淨、成阿羅漢。(『大正新修大藏經』卷第一七・七二二頁上段)
- (36) 宮嶋純子「中国における出家者概念の成立と展開ー訳語の受容を中心にー」(『史泉』〔関西大学〕一〇六、二〇〇七年)
- (37) 『大智度論』(『大正新修大藏經』卷第二五・一五八頁下段)

酒失覚知相、身色濁而愚、智心動而亂、慚愧已被劫。失念增瞋心、失飲毀宗族、如是雖名飲、實為飲死毒。不応瞋而瞋、不応笑而笑、不応哭而哭、不応打而打、不応語而語、與狂人無異。奪諸善功德、知愧者不飲。

(38) 『梵網經』

若仏子、故飲酒而生酒過失無量。若自身手過酒器與人飲酒者、五百世無手。何況自飲、不得教一切人飲、及一切衆生飲酒、況自飲酒。若故自飲教人飲者、犯輕垢罪。(『大正新修大藏經』卷第二四・一〇〇五頁中段)

(39) 『梵網經』

若仏子、自酤酒教人酤酒、酤酒因酤酒緣酤酒法酤酒業、一切酒不得酤。是酒起罪因緣、而菩薩應生一切衆生明達之慧。而反更生一切衆生顛倒之心者、是菩薩波羅夷罪。(『大正新修大藏經』卷第二四・一〇〇四頁下段)

(40) 杉本卓洲『第十章飲酒戒考』、『五戒の周辺―インドの生のダイナミズム』(前掲注30)

(41) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫、一九三〇年)

(42) 宮崎健司『日本古代の写経と社会』(塙書房、二〇〇六年)とくに付録「日本古代写経関係資料」参照

(43) 井上光貞ほか校注『律令』日本思想体系三(岩波書店、一九七六年)二一八頁

(44) 『国史大系』第四卷(吉川弘文館、一九六六年)一八七頁

以上の事例は下記の文献を参照した。

小野晃嗣『中世酒造業の發達』(上)(中)(下)(『社会経済史学』六八、九、一一、一九三六―一九三七年)

小野晃嗣『日本産業發達史の研究』(法政大学出版局、一九八一年)

小野晃嗣『日本中世商業史の研究』(法政大学出版局、一九八九年)

(45) 坂口謹一郎『日本の酒』(岩波書店、二〇〇七年)(初版は一九六四年)

(46) 市立市川考古博物館編『下総国分寺跡発掘調査報告書―平成元～五年度―』(市立市川考古博物館、一九九四年)

(47) 宮本敬一『墨書土器から見た国分寺の講師院と説師院』『岩波講座日本通史』月報二二(岩波書店、一九九五年)

佐竹昭『墨書土器「国院」「国師院」について』東広島市教育文化振興事業団文化財センター編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書』V(東広島市教育文化振興事業団文化財センター、二〇〇三年)

(48) 門田誠一『孝酒』墨書土器の史的環境…武蔵国関連遺蹟出土資料の検討(『文学部論集(佛教大学)』九四、二〇一〇年)

(49) 千葉県文化財センター編『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書四(佐原地区二)』(日本道路公団東京第一建設局、一九八八年)

〈出典〉

図1の墨書土器の実測図は注にあげた各遺跡の報告書により、論旨に関係する図のみを示した。

〈付記〉

本稿は科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号二二五二〇七七七「出土文字資料の出典論的方法による古代信仰展開様相の研究」（平成二二～二五年度）による平成二五年度の研究成果の一部である。